

2020年5月17日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「キリストはここに！」ローマ信徒への手紙 8章 35～39節
主任牧師 加藤 誠

「だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」(ローマの信徒への手紙 8章 35節、38～39節)

聖書の信仰は、今回の「新型コロナウイルス」のような疫病禍をどのようにとらえているのでしょうか。その際、旧約聖書と新約聖書では、疫病の理解に「大きな違い」があることを抑えておく必要があります。

旧約聖書に登場するイスラエル民族は、もともと遊牧民だったので、古くから動物の疫病に悩まされてきたようです。突然、疫病が大流行して大勢の命が失われたり、軍隊が疫病によって一夜にして壊滅した記述などが残されています。それらの経験的知恵からイスラエルの人々は、原因不明の疫病や皮膚病が流行ると感染者を隔離し、祭司の許可なしに集団に戻ることを許さないと決めていました。何より原因不明の疫病は「神の怒り／裁き」と理解され、感染し発病した人は「神の前にケガレたもの」として、人びとから忌み嫌われ、遠ざけられたのです。

それに対し、新約聖書のイエス・キリストは、疫病のために人びとから忌み嫌われ、恐れられ、隔離された人々に積極的に触れていかれました。彼・彼女たちは決して「神の前にケガレ、神の怒り／裁きを受けた者」ではない。「神によって愛されている大切な一人ひとり」であることをその行動によって示されたのです。

今回、新型コロナウイルスが重症化した場合の危険性などを耳にするたびに、私たちの中に「見えないウィルス」に対する恐れが大きく膨らむのを感じるわけですが、新約の時代に人びとが縛られていた「原因不明の疫病への恐れ」をものともせず、「ケガレた人びと」に触れていかれた主イエスの行動が、当時の人びとにどれだけ大きな衝撃であり、物議をかもしものであったかを改めて考えさせられています。

今年の二月、まだ日本ではクルーズ船内の感染が話題の中心だったころ、教会の若いメンバーが同窓会で会った、医療機関で働く同窓生の言葉を紹介してくれたことがあります。「医者使命感はハンパない。あの人たち、マジすごい。みんなが怯えてウィルスに近づかないようにしているのに、自分から近づいていくんだから。家族でもない、運ばれてきて初めて会う人にだよ。俺だったらできない、逃げるね。奥さんに『絶対に家にウィルスを持って帰るな』って言われているし」。

いまだに、新型コロナウイルスの患者さんを受け入れた医療機関やそこで働く人々への差別がやまないことに心を痛めさせられると同時に、二千年前、主イエスに向けられた言われなき非難の大きさを考えさせられます。大きな非難の渦の中を、しかし主イエスはただ神の愛において行動されました。その愛によって多くの人々が厳しい病の中にあっても慰められ、癒され、立ち直らされていったのです。

今から六百年前、14世紀半ばにペスト（黒死病）が大流行し、欧州の人口の三分の一を死に至らしめたと言われています。ペストはその後も散発的に大流行して人々を苦しめました。16世紀初頭、マルチン・ルターが住んでいたドイツのヴィッテンベルグの町をペストが襲ったとき、時のザクセン侯はルターたちに避難を命じますが、ルターはこれを拒否し、町の病人や教会員をケアするために残りました。その時、ルターが書いた「死の災禍から逃れるべきか」という文章があります。

ルターは「困難な時こそ、神の召しに忠実であれ」と語ります。人びとが死に直面し、恐れと不安の中にある時に最も必要なのは、み言葉の奉仕による慰めと励ましである。教会の牧師など霊的な奉仕に関わる者は、病の苦しみにある友や身寄りのない子どもたちをケアするよう招かれている。悪魔はこのような時にキリストを忘れるように仕向けるけれど、キリストはこのペストの町に確かにおられるゆえに、私たちキリストに仕える者もここにいるのだ…と、ルターは励ますのです。

同時にルターは「不必要なリスクを避けよ」と語ります。「無謀な危険は冒すな」と。「わたしはまず神の守りを祈る。そして、わたしは消毒し、空気を入れ替え、薬を用意する。行く必要のない場所や人を避けて、自ら感染したり、他人に移したりしないために。しかし、もし隣人がわたしを必要とするならば、わたしはどの場所にも出かけていく」と。この文章を読んでいると、当時の科学的知見に基づきながら冷静に、しかし、その心の内においてはキリストの愛に深く根ざし行動しようとしているルターの姿が浮かんできます。

今朝、ご一緒に読んだローマ書8章において、使徒パウロは、私たちがこの世界で経験するあらゆる悲しみや苦難、どのような命の危機も、「イエス・キリストに示された神の愛から私たちを引き離すことはできない！」と明言していますが、16世紀のペストの危機を生きたルターたちもまた「ペストの町に、ここに、キリストはおられる！」という福音に力づけられ、慰められながら、危機を生きる実践的な知恵を受け取っていったのでした。今朝、説教後に賛美する新生讚美歌538番『神はわがやぐら』は、この時にルターがつくった賛美歌とされています。

新型コロナウイルスによって、教会のあり方が大きく変えられようとしています。「三密」を避ける「新しい生活様式」においては、以前のような集まりができなくなりそうです。「ぜひ教会に来て下さい」と誘うことができないのは大きな痛手です。けれどもその一方で、このような危機にこそ、私たちを神の愛に結びつけて励まし、慰め、立たせてくださる力、人と人とが共に生きるための正しい知恵が、聖書のイエス・キリストに示されていることを、私たち一人ひとりが、何らかの形で人びとの間であらわしていくように招かれているのではないのでしょうか。

私たちは、目の前に起きていることをすぐには理解できませんが、一切のことは天地の造り主なる神の御手のなかにあることを信じる信仰に招かれています。私たち人間が経験する最も深い悲しみと苦しみである十字架においても、神の愛は絶えることなく、神は生きて働きたもうことが示されたからです。この神への信仰において私たちは、逆境においては忍耐強く、順境においては感謝にあふれ、将来については神の真実をかたく信じ、どんな被造物も、この方の愛から私たちを引き離すことはできないという信仰の喜びを生きるように招かれているのです。